
短編集

更級優月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N6565Y

【作者名】

更級優月

【あらすじ】

短編集です。

これまで掲載していた作品や、部誌掲載のもの。その他多数を掲載予定です。

ありがちな、恋愛小話

『突然のことで申し訳ありません……』。

伝えたいことがあるので、お手数ですが、放課後、校舎裏手の茂みのところに来てください。

あなたを愛する者より』

ありがちなラブレターの内容。

だが、それを手にとって読んだ時、俺は心底嬉しかった。

俺の名は近藤高峰。こんどうたかみね地元の中堅進学校に通う高校一年生だ。

部活は残念ながら入っていない。だが、運動部に入っている連中より痩せていて、筋肉もそこそこついている方だと思う。

背はそんなに高くない160cm。体重も、それなりの51？。

学力的には、たいてい中間で推移している、そんな平凡少年だ。

なんでも平均的な俺だが、ただ、唯一といっていい程平均的じゃないのが、髪の毛だ。

まるで女の子のようにサラサラとしていて、しかも色が藍色ときている。

あ、言うておくが地毛だぞ？ 断じて毛染めなどチャラついたことはしていないからな。

こう見えて、結構真面目なんだぞ？ 俺。

まあ、それは置いておいて、先程のラブレターの件に戻ろう。

そいつは俺の下駄箱から、ヒラヒラと床に落下した。

うん、ありがちなパターンだ。

一度周りをきよるきよる見回し、思い切って手にとってみた。

ピンクの便箋に、ハート型のシールが貼られていた。

これは、裏面の話。

表面はというと……

『私の大好きな、高峰君へ……』

ただ一文、ど真ん中に可愛らしい達筆で書かれていた。

それを見た瞬間、世界が反転したような錯覚に襲われ、俺は思わず下駄箱に手を突き、もう片方の手で頭を押さえた。

これは……夢だ。うん、きっと夢だよ。こんなのが現実にあるはずが無い。

もしもあつたとしたら、世界の終わりだ。

いや、待てよ。もし夢なら、頬をつねっても痛くないはず……。

俺はありがちな方法で、これが夢かどうかを判断することにした。その結果は……

「痛い！」

とつても痛かった。

畜生！ 頬がジンジンするぞ！

これは夢じゃない。とすると、世界が終わるときがやってきたのか……！

でも、その非現実的な考えに、俺は今更ながら起きるはずが無いことを自覚した。

そして、次のステップを踏み出す。

それは、この恋文の中身を確認すること。

あて先は間違いなく俺に対してだ。

あて先を間違えた可能性は、限りなくゼロに等しい。

なんせ、この学校に『高峰』という名前の人間は、俺一人しかないからな！

だからといって堂々とラブレターを読むわけにはいかない。

周りの視線が、痛いんだよなあ。

俺はその手紙を覆い隠すようにして、中身を確認した。

中には、可愛いピンクの便箋に、これまた可愛い字が並

んでいたのだった。

そして、現在に至る。

「はあ……」

もう、溜息しか出てこない。

だって、放課後、学校裏の茂みで待ってるんだぜ？ 健全な男子諸君は、きっと最高の展開に違いない。

「キヤッホオオオウー！！」

こんな奇声を挙げて、飛び跳ねるかもしれない。

だが、不健全な俺にとっては、たいして喜べやしない。

なんせ、暗い過去があるからな。

手紙を読んだ直後は、口から心臓が飛び出すほど嬉しかった。

でも、こうして教室にやってきて、俺のマイナス思考が頭を擡げ始めた。

『どうせ、からかいの手紙だよ』

『また、いじめられるんじゃないか？』

『行っちゃって、どうせブスの小太り女だよ。無駄足になるぜ？』

流石に最後の一つは、この恋文を書いてくれた某さんには悪い。

だが、前二つはそうそう見過ごせない。

過去にも、このような事件はあった。

それは、小学生の頃。

今回と同じように、俺の下駄箱に、可愛い便箋が入っていた。ご丁寧に、お菓子（焼きたてのクッキー）も添えて。

俺は大はしゃぎで手紙に書いてある校舎屋上に向かったのだった。だが、そこで待ち受けていたのは、手紙を書いた女の子ではなく、ごつつい体格の男子数名。

実はその手紙、俺をいじめっ子に陥れるための罠だったのだ。

数名の男子の中で一番筆圧が弱く、字が綺麗な痩せ型の男子が書いたものだったのだ。

そいつらは、嬉しそうに微笑んでいた俺を見て、ゲラゲラ笑った。「ばかじゃねえの？ わざわざこんな物につられてやってくるとはよあ！」「お前も、まだまだガキだったってことだな！」

ガキはどっちだ！ と叫びたくなった。

でも、叫べない。

なんせ、相手は学年でも一、二を争うほど力の強い悪ガキなのだ。少しでも抗えば、こてんぱにやられるに違いない。

俺は両手を握り締め、わなわな震えながら沸きあがってくる怒りを必死に抑えていた。

そんな俺を見て、悪ガキどもは言葉を続ける。

「おつ？ 自分が哀れで泣き始めたか！ きやはは……！ これは傑作だ！ そうだよな？ 泣きたいよな？ 楽しみにしていた告白タイムがパーだもんな！ ははは……！」

「ははは……！」

皆、腹を抱えて大笑い。

でも、俺は泣いてはいなかった。

ただ、怒りに震えていただけだ。

それを、泣いていると勘違いするとは、どういつ目をしているんだ。

視力的に大丈夫なのだろうか？

俺はそれ以上ここにいと本当にといつらを殺してしまうだろう

と思い、踵を返し、急いで屋上を後にしたのだった。
背後で、悪ガキ達の高笑いが聞こえてきた。

そんな事件だ。

それから数週間ずっと、俺はそれをネタにされ、いじめられた。
自殺も考えた。

でも、怖くて出来なかった。

人間というものが、とても恐ろしくて、三日間、部屋に閉じこもったこともあった。

だが、それを乗り越えて、過去を払拭して、こうして生きている。
生きていて良かった。そう思えるときもあった。

でも、今日。過去の事件を思い出させる物が、俺の下駄箱の中に入っていたのだ。

危うく自我を失いかけたが、教室にやってきて落ち着きを取り戻すと、先程の過去の事件が鮮明に脳裏によみがえってきた。

そうして、溜息。

俺は一体、どうすればいいのだろうか？

悩む俺をよそに、時間は過ぎ去っていった。

そして、あつという間に放課後。

俺は相変わらず教室にとどまって、行くべきか、行かざるべきか悩んでいた。

他者から言わせてみれば、さっさと行け！ というだろう。

だが、暗い過去を持つ俺にとって、それは「さっさと死ね！」という死の宣告同様の効果を持つ。

それゆえ、足が……いや、身体が動こうとしない。

でも、もしこれが偽りの無い本当の恋文なら、名も知らぬ一人の女子が俺がやってくるのを、今か今かと茂みで待っていることだろう。

そう思うと、彼女に申し訳ないという気持ちが生え、身体が無理やり動こうとする。

しかし、前者がそれを押しとどめる。

俺は感情に板ばさみをされ、その大きな隔たりに葛藤していた。

悩むこと、かれこれ二十分。

もう大半の生徒は帰るか、自分が所属する部活の活動に従事していることだろう。

だが、俺は違う。

これから、戦地に赴こうとしているのだ。

果たして、これが正しい判断なのかは分からない。

だが、もしこれが本物の恋文だったときの、か弱い一人の女の子を待たせるのは悪いという俺の善心が、マイナス思考をぶち破ってこうして校舎裏に向かっていることには変わりない。

不本意ながら、とにかく行ってみようという気にはなった。

そうして、俺は鞆を手に持ち、下駄箱で靴を履き替えて校舎裏に向かった。

そして、校舎裏。

校舎裏は森になっていて、たまに熊が出没するから要注意だ。

先生方も、あまり近寄らないようにと呼びかけていた。

だから、まったく人気が無い。

裏を返せば、告白するにはうってつけの場所というわけだ。

俺は校舎の影に隠れて、それらしき女の子がいるかどうかを確認した。

そして、見つけた。

その人物は、ある茂みに隠れるようにして佇んでいた。

俺は彼女の名を知っている。

植村理沙。うえむら りさ 同じクラスの女子だ。

女子の中でも長身で、身長は俺くらいだろう。

長い髪は腰の少し上まであり、体型的には華奢で、胸はまるで男のようにぺたんこだ。

だが、抜群のプロポーションと細い手、足首。さらにかんりの美形で、それを補っているかのようなだった。

実際、彼女はこの学校で一、二を争うほどの美少女で、クラス外でも人気は高い。

中には好きすぎて、植村理沙ファンクラブなるものを作ってしまう阿呆が現れる始末。

それほど、彼女を自分のモノにしようとする男は大勢いた。

そんな彼女が、今俺の目の前で、茂みに隠れて誰かを待っているのだ。

改めて、確認しよう。

今、校舎裏にいるのは、俺と植村の二人だけ。

しかも、今は放課後。

普通、放課後にこんなところにやってくるのは誰もいない。

俺は確信した。

彼女が待っているのは、この俺だということを。

すこし、テンションが上がってきた。

俺は彼女に気づかれないように、足を踏み出そうとした。その時、彼女が辺りを見回し始めたので、俺は反射的に再び校舎裏に隠れた。なんとか見つからなかったみたいだ。

彼女はそれから辺りをぐるりと見回し、そしてポツリと呟いた。

「あゝあ、結局来ないのかな、高峰君。もう、帰ろうかなあ……」

両手を後ろで組み、右足をブラブラさせて、悲しそうにしている彼女は、本当にこのまま帰ってしまいそうで。

……というか、俺の名前を呼んでたよな？ うん、間違いない。俺は結構聴力いいからな。

って、ヤバイヤバイ！ このままここに隠れていたら、植村さん

が帰ってしまう！

男、近藤高峰！ 今こそ勇気を振り絞る時だぞ！ ここで逃げてしまつては、男としてのプライドを未来永劫失うことになるぞ！ 心の内で自身を鼓舞し、校舎の陰から一步、足を踏み出した。新しい階段を一步、上るために……。

校舎の陰から姿を露にした瞬間、植村さんがこちらを見た。そして、あつという間に顔を真っ赤に彩り、困つたように俯いてしまった。

彼女の腰まで届く、絹のようなサラサラとした漆黒の髪が、風によつて宙を踊る。

『美しい……』

心の中で、思わず呟いていた。

漸く俺は彼女の元に辿り着いた。

視線の高さは、ほぼ同じ。

若干俺が2cmほど高いくらいだ。

まず、俺が切り出した。

「遅れてごめん。待った？」

俺の問いかけに、俯きながらフルフルと首を振った。

「だ、大丈夫……」

か細いソプラノボイスが、俺の鼓膜に届いた。

「そうか。……で、伝えたいことって、何？」

既に手紙を見ている俺としては、もう何を伝えたいのかは分かりきっていた。でも、確認のために、もう一度。

植村さんは俯いていた顔を上げた。

目が、潤っていた。

唇が、朱を含んだように、紅かった。

吐息が、艶やかだった。

そんな植村さんが、意を決したように、口を開いた。

「あ、あのお……ずっと好きでしたっ！　よ、良ければ……結婚を前提に私と、……っ、つき合ってください！」

お願いしますという言葉と、彼女が深々と頭を下げたのはほぼ同時だった。

予想通りの展開になってきた。

ただ、『結婚を前提に』という単語が飛び出してくるとは、予想外だった。

一応、確認。

「あのお、植村さん？　本当に俺に言っているの？　間違っ……ないよね？」

頭を垂れながら、植村さんは言った。

「はい。間違いありません」

はつきりと意志が籠もった、まっすぐな言葉。

俺は、決断した。

「こんな俺でよければ……。こちらこそよろしくお願いします」
そう言っ、俺も頭を下げた。

頭を下げて、気がつく。

植村さんが、泣いている。

「……うう……あ、ありが……と……」

何だか労われない気持ちに苛まれながらも、俺は植村さんが泣き止むまでその場を動かなかった。

「大丈夫？　落ち着いた？」

程よく時間が経ち、俺は植村さんに声を掛けた。

「……うん。ありがと」

まだ声に元気は無いものの、先程と比べると、落ち着いてきたようだ。ここでこれ以上泣かれると、異性との交友経験が薄い俺にと

って、どう接していいのか、どう声を掛ければいいのか、判らなくなってしまう所だった。

とにかく、彼女が泣き止んでくれたことに感謝をしなければなら
ない。

と、赤い目をゴシゴシ擦って、俯きがちに言った。

「私、昔は苛められっ子だったんだ」

声が震えていた。握った小さな拳が、華奢な撫で肩が震えている。
俺は突然の告白に、驚き息を呑んだ。

こんなにも可愛らしくて、優しい植村さんが苛められていたこと
があつたなんて、予想だにしなかった。

なぜ、彼女は苛められていたのか？ 俺は理由を聞こうと口を開
きかけたが、植村さんが先に口を開き、先程の続きを話し始めた。

「小学校四年生の頃だったの。それまで私、みんなから苛められて
たんだ。みんなよりも勉強ができるから。ただそれだけだった。最
初は机の向きを逆にされる事から始まって、段々悪質になっていっ
て……。最終的には殴られたりもしたの。体中に痣を作って帰って
お父さんとお母さんは頭を抱えて学校に相談したけど、収まらな
く……」

そこまで話し、植村さんは一息吐いた。

俺は、植村さんの衝撃の過去を聞き、驚きのあまり口をポツカリ
開けて、彼女の話聴いていた。彼女が話を止めたその時も、俺の
口は開いたままだった。

そんな俺をよそに、植村さんは話の続きを話し始めた。

「それから、何度も自殺を考えた。実際に、天井についていたホッ
クにロープを引っ掛けて、輪に首を引っ掛けた事もあったの。……
結局、怖くて支えてた椅子を蹴倒すことはできなかったけどね。で
も、その時死なないで本当に良かったと思う。だって……」

そして、ほんのり赤みがかった顔を下に向け、ボソボソと言っ
た。

「こうして、高峰君に遇えたから……」

その言葉を聞いた瞬間、何かこそばゆいような、何ともいえない感覚に襲われた。

なんだか、体中がむずむずする。かといって、我慢できないほどの痒さではない。

これは、一体なんだ？

俺、どうかしちゃったのか？

視線を彼方あちこち此方に巡らせ、挙動不審になりながらも、俺は一つの言葉を紡いだ。

「俺も、植村さんに“好き”って言われて、とても嬉しいよ……」

きつと、俺の顔は真っ赤な紅葉の様に染まっていたと思う。

言い終わって、あまりの羞恥心から後悔した。

でも、植村さんはそうではないようだった。

俺の様子をさも楽しそうに眺めていた。同時に、その表情には感謝の意が表れていた。

その姿はまるで、一生懸命努力してお手伝いをする子供を見守る母親のようだった。

その後も、俺と植村さんはそこにいた。

何を話すわけでも無く、ただそこに居ただけ。

お互い、こうして何もせずに座っていたいだけ。

それだけで幸せを得ることができるから……。

夕陽が綺麗だ。

もうそろそろ完全下校時間になってしまふ。

仕方なく俺は立ち上がり、植村さんに言った。

「俺、もうそろそろ帰らなくちゃいけないんだ……」

すると、彼女ははっとしたが、すぐに罰の悪そうな表情を浮かべた。

「ごめんね。私が高峰君を呼んだばかりに……」

俯く彼女に、俺は何て声を掛ければ良いのだろうか？

心の中で呟き、頭の中では必死に最善の選択肢を模索する。
そうして導き出された答え。それは……

「植村さん、ごめん」

「——っ!!」

俺は俯く彼女を抱きしめていた。

これしか、思いつかなかった。

でも、いいよな……？

「高峰……君？ どうして……」

植村さんは突然のことに驚き、上手く言葉を発せないでいた。

「今はこうさせてくれ」

彼女の華奢な身体を抱きしめながら、俺はそう答えた。俺の我儘に、植村さんはこくりと頷いてくれた。

とてもありがたかった。

暫くそうして抱き合って、離れた。

「また、明日」

俺が言った。

「うん。また明日」

植村さんが、笑顔で言った。

そうして、俺と植村さんはそこから別れた。

俺は思った。これから始まる新しい日々は、多難なものになるだろうと……。

あれから、二年が経った。

俺達三年生は受験シーズンに突入していた。

毎日が忙しく、時間はあっという間に過ぎ去っていく。

だが、俺には理沙がいた。

疲れているときでも、怒っているときも、いつも理沙が隣にいてくれた。

そのおかげか、元々平凡だった俺の学力は、次第に向上していき、現在では学年でも常に五番以内に入るようになった。

これも、理沙がいてくれたから、出来たことだ。

彼女も、俺と同様勉学に励み、つい最近生徒会を引退した。

生徒会長として頑張っていた彼女の姿は美しく、見るものを虜にした。

まあ、俺はほぼ毎日見ることが出来たがな。

ちなみに、俺は生徒会副会長だった。

そして、昨年行われた文化祭で、『ベスト・オブ・ザ・カップル』なる称号を俺と植村は手にし、俺と植村の交際は、学校全体が知ることとなり、同じクラスの皆や、他のクラスの友人達は、温かい目で俺達二人を見守ってくれた。

そうして、俺と植村は、時には喧嘩をし、時には慰めあい、今日を迎えている。

今の俺と植村があるのは、周りの皆が支えてくれているからかもしれない。

そうして、今日の授業が終わり、放課後。

机の中の教科書や参考書を鞆にしまいこみ、ふと時計を見る。

短い針は若干"5"に寄り、長い針は"9"と"10"の間を指していた。

もうそろそろ五時か……。

最近、時間が過ぎ去るのが物凄く早い気がする。

多分、気のせいではないだろう。心が慌てているのだろう。

何故だか、溜息が出た。

「なあゝに溜息吐いてんの？ そんなんじゃ、入試落ちちゃうよ？」
いきなり肩を叩かれた。

「うおっ！ ……びっくりさせんなよお、理沙」

心臓の鼓動を早め、声のしたほうを振り返る。そこには、にやにやと、天使のような微笑を浮かべる理沙がいた。

「もう、高峰はチキンなんだからあー！」

「おれはチキンじゃねえ！ キチンだ！」

「もうどっちでもいいじゃん！ それじゃあ、今日からチキンね？」

「何故そうなる……」

「まあ、いいんじゃない？」

くだらない会話。でも、これが楽しい。

これだけで、俺は幸せだった。

“キーン……コーン……カーン……コーン……”

「あっ」

いつの間にか、時計は五時半を回っていた。

もうそろそろ帰らないと、大変なことになる。

「……もう、帰ろうか？」

俺は理沙に言った。

「うん、そうだね。帰ろうか」

理沙はそう言って、俺の左手を握った。

俺は鞆を背負い、夕焼けが綺麗な空を横目で見て、理沙と共に下駄箱に向かった。

ありがちな、恋愛小話（後書き）

恋愛ものを書きたくなくて、仕上げたものです。
（初出：2010年10月7日、当サイト）

ゲーム少年が世界を救う!?

《前記》

「眠い……」

ぼさぼさ頭の少年、遼^{りょう}はゲームのコントローラーを握りながら呟いた。

彼が今プレイ中のゲームは、先月発売されたばかりの新作だった。バトル要素もありのファンタジー系RPG。

予約をしないと手に入らないといわれるほど人気の作品だった。それを、彼はディスクが擦り切れるほどやり込み、パーティーのレベルはオールマックス。

一日の大半を学業に費やす学生とは思えないほどのやり込み時間。彼はネットで話題の神業ゲーマーでもあったため、それが可能になったのだ。

「それにしても、このアイテムはどうすれば手に入るんだ？」

今、彼の眼中には一つのアイテムがある。

『細霧草^{ほそぎりくさ}』というアイテムで、それを手に入れると隠しダンジョンが出現するといういわく付きのアイテム。

しかし、このアイテムは数億分の一の出現率で、未だゲットしたというゲーマーはいない。

というよりも、本当に存在するのかが怪しまれている。

そんなアイテムを求めてゲームを起動すること2時間、ゲームの神は遼に微笑んだ。

「あ、あれは……!？」

遼は思わず自分の目を疑った。

自身が操作するキャラクターの少し先、土を踏み固められた道沿いの叢^{むすく}に、それは確かに生えていた。

幻の植物、細霧草。

彼は大きくキャラクターをその場所に向かわせた。

近く来ると、件の草の上には、“細霧草”というアイコンが出ていた。

見間違っはすも無い。

遼の心臓は、爆発してしまうのではないかというほど高鳴っていた。

「つ、ついにこれを手にする時が来たのか……」

アイコンを再び確認し、“拾う”動作を行った。

画面上に、『細霧草を手に入れた！』と表示されるのを見て、遼は立ち上がって喜んだ。

彼は喜びを身体全体で表していた。

だが、このとき彼は知るはずも無かった。

自身が立っている床に、純白の魔方陣が現れていることに……。

《起》

――？――

「テラ様。仰せつかった物の準備が整いました」

「ご苦労です。下がっててください」

蠟燭の火が暗闇の中でぼうつと揺らぐ。

光一つ差し込むことの無い暗い場所で、純白のローブに身を包む少女と老人が、魔方陣の前に話し合っていた。

「テラ様、これから何が始まるのでしょうか？」

恭しく後ろに退きながら、老人は少女に訊ねた。

テラと呼ばれた少女は、半身を老人に向け、笑顔で話し始めた。

「これから、この混沌とした世界を救う勇者様を召喚します。戦闘

能力などは分かりませんが、この世界を救ってくれるということには変わりありません。それでは、行きます」

そこで話を切ると、少女は懷から文庫本ほどの魔術書を取り出すと、目的のページを開いた。

「我、汝に願う。今ここに、混沌とした世界を救う強き者を召喚することを望む。汝、我の望みを聞き入れたまえ！」

詠唱を終えた途端、魔方阵が真っ白に光り輝いた。

「な、なんと……！」

テラの後方で、背の曲がった老人が呻いた。

「ついに、現れるのですね……！」

眩い光に目を細めながら、テラはその時を待った。

そして、ついにその時がやって来た。

魔方阵の輝きが一層強くなった。

「くう！」

テラはあまりの眩しさに、目を閉じた。

魔方阵からは火花が散り、光もより強くなったところで、何かが地面に落ちる“ドサツ”という音が、空間に響く。

「いてて……」

光が消えると、そこにはぼさぼさ頭の遼がお尻を擦っているだけだった。

そう、魔方阵の真ん中で。

「……」

テラは一言も話すわけでもなく、視線は魔方阵上に現れた謎の少年に痛いくらい注がれていた。

「……ん？」

ここで、遼は自分のことをじっと見つめる一人の少女に気がついた。

彼は両目をごしごし擦り、目を細めた。

狐のような切れ目が細められ、傍から見れば、目を瞑っている様にしか見えない。

「何か用ですか？」

気軽に声を掛けてみる遼。

一方テラは、普通に話しかけてくる少年の……いや、ここは勇者と呼ぶべきなのだろう。普通に話しかけてくる勇者の、いかにも頼りなさそうな体軀を眺めて、深くて大きい溜息を一つ。

そんなこととは露知らない遼は

「どうしたの？ 溜息吐くと、その分幸せが逃げちまうぞ？」

魔方阵の中央で胡坐あぐらをかき、右手の小指を鼻の穴に差し込みながら、ぼんやりとそう言うのであった。

「テラ様、このような若造がこの世界を救うことなど出来るのでございましょうか？」

少女の後方で立っていた老人が、啖呵たんかを切ったようにテラに詰め寄る。

「そ、そんなこと、私には判断しかねます！ 実際にどれほどの力を持つているか分かりませんし、調べてみる価値はあると思います」
老人は老人で。テラはテラで焦っていた。

このぼさぼさ頭の少年が、本当に世界を救ってくれるのだろうか？
もし仮に救うと言ってくれたとしても、どれほどの力を秘めているのか？

必要としている情報が多すぎた。

そんな二人を尻目に、遼は魔方阵の中で寝転がり、辺りをゆっくり見回す。

だいぶ目も慣れてきたのか、はつきりとはなくとも、今いる場所の状況は確認できた。

レンガ造りの壁と床。壁には、この空間を照らし出すには弱々しすぎる蠟燭が等間隔に並んでいる。

遼は、ここが冷めた空気の漂う、牢獄のような地下空間だと推測した。

「ふむう……。おおそ検討は付いたんだがな。ここが何処なのだかが分からない」

思案顔で呟く遼。

愛用しているクリーム色カーディガンの裾を伸ばしながら、ゆつくりと立ち上がり、背伸びを一つ。

そして、少し離れたところであたふたしている二人に、この場所について詳しく聞こうと一步を踏み出した。

――？――

「ところで、これって何をするの？」

全身に謎の幾何学模様を彩られた遼は、少し離れた場所にて分厚い本を床に広げるテラに訊ねかける。

「これ？ これはあなたの中に眠る魔力や知力なんかを調べるためのジューゼータ方程式よ」

「……じゅ、じゅでー……」

「ジューゼータ方程式！ これくらい一般常識よ。あなた大丈夫？」

「いや、そんなこと言われても知らねえし……」

遼は、それ以上聞いても返ってくるのは侮辱の嵐だと思い、口を閉じた。

その途端、身体に描かれた幾何学模様が淡紫色の光を放ち、そして複雑に交わり始める。

「な、何が起こって……」

「ちよつと黙ってて！」

彼の疑問の声は、分厚い魔道書を片手でなぞる少女の罵声によってかき消された。

仕方なしに、再び口を閉ざす遼は、どこか不満げだ。

（これって、俺の能力を測っているって事だよな？）

少し離れた位置に陣取る少女と老人を見据えながら、遼は思う。

（まさかとは思っけど、ドラ。エのザ。キじゃないよな？ F。の。スじゃないよな！？）

「雑念やめて！ 手元が狂うから！」

深刻に考え込んでいた遼の元に、またしても罵声。

（なんだよ。別にいいじゃねえか）

心の中で悪態を吐くと、彼はそれっきり喋るのをやめた。

そして、思うのもやめた。

彼は今、何も考えてはいない。

言うなれば、呼吸をして、心の音を響かせる器。

「そうよ。やればできるじゃないの」

徐々に光を帯び始めた魔道書に片手を突くような形で、少女はポツリと呟いた。

そして、視線を落とすと、遼には理解することの出来ない謎の言葉その口から紡いだ。

「……………！！」

まるでノリのいい曲のように、リズム良く、飽きさせず。

遼は次第に眠くなって行くのを感じた。

（やべえ。眠くなってきた……）

視界がクロに染まってゆく中、聞こえてきたのは呟き。

訛りの酷い方言……いや、異国の言葉という例えのほうが正しい。
最後に遼はそう思った。

そして、彼は真黒に染まった。

――

「……………む？」

次に遼が目を覚ますと、そこはいかにも「手作りです！」というほど雑なログハウス。

そこら中に隙間が空いていて、隙間風が寒々しい。

「誰だよ、こんな欠陥住宅作ったのは！ 訴えるぞ！」

遼はありったけの声で叫んだ。

“ミシッ”

「……えっ？」

何かが軋む音。しかも、あちこちから。しかも、徐々に大きくなってゆくそれ。

彼は身の危険を感じ、ログハウスから飛び出した。途端、それは大きな音を立てて崩れ落ちた。

正に、危機一髪。

「ふう……危なかったぞ」

溜息を吐くと、改めて自分の状況を確認した。

着ているものは、いつものクリームカーディガン。

そして、地味な色のズボンと革のベルト。

遼の普段着そのものだった。

「よしっ。やっぱりこうでなきゃな」

無駄にビシッとポーズを決める。まるで、ウサイン・ボルトその人のように。

その後彼は辺りの景色を眺めてみた。

どうやらここは小高い丘の上のようで、遠くに小さな集落らしきものも見えて取れた。

そこからは煙が上がり、人がいるのが伺える。

遼は面倒くさそうに溜息を吐くと、その場に腰を下ろし、空を仰いだ。

雲一つと無い青空。そこに輝く真つ赤な太陽。

ピクニクには持って来い、最高コンディション。

しかし、ここは魔法が存在する“異世界”。ピクニクという単語が存在するかも分からぬ異郷の地でもある。

「はあ……」

また、遼は溜息を一つ。

「溜息ばかり吐いていると、せっかく訪れた幸せが泣いて出て行ってしまいますよ？」

「うわっ！」

いきなり視界に入ってきた少女を見て、遼は腰を抜き、距離をとった。

「そんなに怖がらないでよ」

「だって、仕方ないだろ！ おま、お前の耳……」

そう。彼女の耳はおかしかった。

それは獣のようで、目の横ではなく、頭の上に。しかも、申し訳なさそうに生えていた。

見るからに、黒猫のような耳。

触ったら、ふさふさしていそうなそれを遼は凝視して、引きつった表情を浮かべた。

「お、お前は人間か！？ それとも化け物か！？」

「もちろん人間に決まっているでしょう！ 化け物なんてごめんだからね！」

「んじゃあ、お前は何者だ！ ここで今すぐに答えろ！ 百文字以上百五十文字以内で！」

「私はテラ。テラ・ホルンゲート。古豪の貴族、ホルンゲート家の末裔で現当主よ」

「全然百文字いってないじゃないか。もう一度やり直し」

「そんなの関係ないでしょう！」

「いや、関係ある」

いつの間にか遼は、先程まで抱いていた少女への恐怖心を忘れ、彼女と（平穩ではないが）言い合っていたのだった。

《承》

――？――

「で、何で俺をここに連れてきたのさ？」

場所はかわって、古ぼけた大きな洋館の一室。

ここはなんでもホルンゲート家が世を謳歌した時代に建てられた屋敷らしく、ホルンゲート家が衰退した後も代々の当主が住み続けているらしかった。

外見は名前も知らぬ蔦植物に覆われており、その姿はまさに“お化け屋敷”そのもの。

実際、お化けが出ると近隣の住民から恐れられているとか。

……話を戻そうか。

テラと名乗る少女にこの屋敷へと誘われた遼は、まさに今彼がいる部屋に通された。

その部屋には豪華なインテリアが並び、当時の様子をうかがい知る事が出来る。

紅茶を入れると席を立ったテラに、現状をまったく理解していないご様子の遼が問いかけたのだった。

彼女は彼の問いかけに立ち止まり、振り返った。

頭についている耳がひよこひよここと動く。

「連れてきた理由は追って話すわ。今は静かにそこに座ってて」

そっけなく言うのと、踵を返して行ってしまった。

その時に遼は、彼女の真っ黒の尻尾が嬉しそうに動くのを見逃さなかった。

――

しばらくすると、テラが戻ってきた。

手には配膳用のプレート。その上に二つの黄金色のカップとスプーンらしきもの。そして、甘い香りの菓子が乗せられていた。

「口に合うかどうかは分からないけど、ひとまずどうぞ」

遼の目の前に置かれるカップ。中にはクリーム色の良い香りがす

る液体。

「ありがとうございます」

妙に丁寧口調になってしまふ彼は、こそばゆそうにカップを手取る。

一口啜れば、口の中に広がる練乳のような甘さ。

彼は満足そうに微笑むと、一度カップを置き、先程の話題の盛り返しを試みる。

「さっきの話なんだけど……」

「どうだった？ この紅茶、私の新作なんだけど……美味しかった？」

「……」

遼の話は、彼女の紅茶に対する感想伺いによって途中で消え去った。

「ん？ 浮かない顔をしてるけどどうしたの？」

自分が原因だと思ってもいない少女、テラ。ご機嫌伺いの如く遼に尋ねかける。しかし、彼は「別に」と淡泊な反応を示し、溜息を吐いた。

相変わらずテラは頭の上に疑問符を浮かべていたが、遼が「これ、美味しかった」と呟いたことで、自己完結をなす事となった。

一方遼はというと、自分の話を無視された為にあまり心地よい体ではなかった。

この少女に対する価値観……言ってしまうえばそのものの定義を確定させようとしている今、無視されてしまったのだ。

これから先、どうするべきかとゲームで培った知識をフルに稼働させて考え込む遼。

その結果生まれるのは、沈黙。

未だに白い湯気を漂わせる紅茶。それを挟んで対面する二人の間に訪れる静寂。

静かなのは苦手というように、テラの耳、尻尾は忙しく動き続けた。

ボフツと尻尾が椅子を叩く。

無音の室内に、その音は良く響いた。

「うん。うん」

いきなり遼が頷き始めた。

「にやつ!？」

お約束とばかりに驚くテラに、今度は遼が首を傾げた。

「どした？ ゴキでもいたか？」

彼はこの場にいないで欲しいランキングにおいて十五連覇中の猛者の名を口にした。だが、少女は“ゴキ”というものが何なのか分かっていないご様子で、首を斜め四十五度に傾ける。

それを見た遼は、「これはダメだ」と心中愚痴を溢し、「分からなかったらいいんだ」と彼女に言葉を掛けた。

少女、テラは自分がいけないと思いついたのか、右手でグーを作ると、その小さな頭を何度かポカポカ叩いていた。

――

時間が経つということ。それはその場にいる人がより密接に関わる様になるということ。

遼とテラも例外ではなかったようで、次第に言葉数も増えてきていた。

「ここの鳶はね、百三十年も生きているのよ」

「それは凄いな。ギネスもきつと飛びつくだろうな」

「……『ぎねす』、とはなんとという生き物なの？ 毒をもっているのかしら？」

「生き物でもないし、毒も持っていない。いろんな“一番”がたくさん掲載されている本みたいなものだよ」

「そうなのですか……。一度見てみたいものですね」

「ああ、きつとハマること間違いなしだな」

ときたま謝った知識が加わることがあるものの、二人の間にあつた差は大分縮まり、もうすぐ手も届くのではないだろうかというところまで来ているようだった。

そんな時、テラが重々しく口を開いた。

「リヨウに聞いて欲しい話があるの」

いつの間にか二人は互いの名前を知り、その名前で呼び合うようになったので、“リヨウ”と呼ばれて遼は「ん？」と返事をし、て次の語を待った。

「実は、あなたをこの世界に招いたのには理由があるの……」

何かを含ませるようにして話すテラに、遼は「それで？」と軽く相槌を打ち、次を促す。

テラは彼の意図を察したのか、今度は淡々と話し始めた。

「実は、この世界には悪い王がいて……みんなはそいつを『魔王』って呼ぶの。そいつの本当の名前は『ラスタルフ・ゴルバドール』っていうの。ラスタルフは何処からとも無く現れて、世界を恐怖に陥れたのよ」

彼女はそこで一息吐くと、その華奢な身体を振るわせた。今、彼女の耳はパタンと折れて頭の上で小さくなっている。

よほど怖がっているのだろうと思った遼は、震える彼女を優しい視線で見守った。

そして、震えながらも彼女は続ける。

「そのラスタルフはこの近くに巨大な城を建設して、全てをその手に掌握しようとしているの。そこでリヨウ、あなたにラスタルフを倒してもらう為にこの世界へと招いたのよ」

「ふーん……って、ちよつと待って！」

聞いていて納得した様子だったが、急に慌てだす遼。

無理も無いはずだ。なんせ、自分の使命がこの世界の人々を恐怖のどん底に陥れる魔王、ラスタルフを倒すことなのだから。

遼はテーブルに置かれた菓子のひとつ口に運ぶ。口の中に、桃に似たほのかな甘さが広がった。

「リヨウ……？」

テラは遼の挙動不審を見て不安になったのか、酷く落ち込んだ声色で彼の名を呼んだ。

「でも、その……ラスタルフは強いんだろ？」

舌が思う様に回らず、肝心の魔王の名前を間違えてしまう始末。

「ラスタルフ。今まで千を超える勇敢な戦士達がヤツを倒しに行っただけ、誰一人として戻ってこないの。……おそらく、ラスタルフにやられたんだと思うわ」

「そんなやつに、俺が勝てると思うのか？」

「うん。きつと勝てるわ」

「こ、根拠はあるのか？」

「地下宮殿で行ったジュータ方程式で、あなたはラスタルフと同等。いや、それ以上の力を持っていることが分かったの。それが、私があなたを推す根拠よ」

「……」

遼は心の中で戦っていた。もちろん、相手は“弱い自分”。

強い自分は、魔王と戦ってやるうじゃないかと闘志を漲みなぎらせていた。

しかし、弱い自分かというと、どうせ勝てっこない。絶対無理だとの一点張り。

（どうしよう。これは素直に「はい、戦います」って言ったほうが良いのか……）

「リヨウ、時間が無いのよ！」

なかなか答えが出せずにいる遼に、テラが詰め寄る。

しかし、彼は未だに悩んでいた。

（勇者って呼ばれたい。祝福されたい。……でも、魔王にもしやられちゃったとしたら、俺、二度とあのゲームが出来なくなるんだよな？ それはイヤだ。断じて受けたくない）

「リヨウ！」

テラが身を乗り出し、重病患者のような遼の顔にずっと自身の

顔を近づけた。

その距離、およそ数センチ。

少しでも身動きをしようものなら、間違いなくキスへと発展してしまうような距離だった。

「……俺」

弱音を吐く遼に、テラが諭すように語り掛ける。

「リヨウ、良く聞いて。私はリヨウに賭けてるの。きっと偉大なことをやってくれるって。物凄い賭けだって事は分かってる。でも、私とリヨウならきつと出来る。不可能はないって思ってるの。……ねえ、リヨウ。一緒に魔王を倒しに行こう？」

窓の外ではいつの間にか雷鳴が轟き、風もやや強まってきた。屋敷の庭にそびえる柳の葉が、不気味な音を立てて揺れていた。

“ピカツ！　ゴロゴロゴロ……”

すぐ近くで雷が鳴った。屋敷の中が明るく照らし出された。

薄暗かった室内は照明を当てたみたいに明るくなり、遼は彼女の表情をこれまで以上にまざまざと見せ付けられた。

「テラ、泣くなって……」

彼女は泣いていた。

「泣いたら、俺まで悲しくなるだろ？」

遼の声が、若干上ずる。

「テラ、俺、決めたよ」

「……えっ？」

テラの弱々しい涙声が、遼の耳に届く。

彼はそれを身体全体で受け止め、噛み締めるように呼吸を整え、と、はつきりこう宣した。

「俺、魔王ラスタルフを倒すよ」

――？――

嵐の前の静けさとはよく言ったものだ。

外では、未だに雷鳴が勢いを保ち続け、一向に止む気配を見せなかった。

時折雷が落ち、爆音を響かせていた。

そんな中、遼は遠くに聳え立つ巨大な城を見やっていた。

――あの場所に、魔王ラスタルフがいる。この世界全てを恐怖に陥れる存在が。

窓から目を凝らせば、遠くに小さいながらも巨大な城の存在を確認できた。

「あそこに行くんだな……」

「うん」

遼とテラは、部屋の窓枠に体重を預けて、ラスタルフの居城を見つめていた。

それから二人は、は豪華な食事を取った。

横に無駄なほどに長いテーブルに向かうのは、この二人だけ。

だが、現れる料理の量はとても二人で食べきれるものではなかった。

遼にはこれが『最後の晩餐』に思えて仕方がなく、よけい箸が進まない。

しかし、彼はテラに余計な心配を掛けさせまいと、目の前にあった蒸しパンのような料理を手にとった。

一口頬張ると、先程の菓子のような桃に似た味わいが広がった。

「おいしいな、これ」

先程の勢いが嘘のように手が止まらなくなる遼。

その様子を見ていたテラは微笑み、尻尾をしきりに動かした。

「よかった。心を込めて作った甲斐があったわ」

やや頬が赤くなっているのは照れている証拠だろう。彼女は頬にそれぞれ手を寄せて、うつとり瞼を閉じた。

時間が流れていく。

二人はその後、ゆっくりと食事を楽しんだ。

――

「さて、いよいよね」

「ああ、覚悟は出来てるさ」

屋敷の正門に二人はいた。

雷も幾分収まり、雲の切れ間からは瞬く星々が見てとれた。

「ところで、この格好はなんだよ？」

「ん？ 旅装」

今、二人は旅装をとっていた。

遼はいつもの服の上から漆黒のローブを羽織り、見た目からは想像もつかないほどに軽い大剣を背負っていた。

一方テラはというと、こちらは膝上十センチほどの白いドレスのような服を身に纏い、その上からこれまた純白のローブを羽織っていた。長めのブーツらしきものを穿き、頭には真っ白の三角帽子を被っていて、ご自慢の耳は隠れてしまっていた。

「俺はまだしも、テラの格好はなんだ？」

遼が頭を捻っていると、彼女が笑顔でこういった。

「白魔導士だよ？」

「……」

遼は思い切り突っ込みたくなったが、我慢することにした。

よくよくテラを見てみれば、手に大きめの石がはめ込まれた杖を持っている。

確かに、白魔導士に見えなくも無い。

というより、これこそ正にファンタジーじゃないかと遼は内心突っ込んだ。

そんなこととは露知らず、といった具合に、テラは一人で気合を込めるように叫び、遼の方に向き直ると、手を取って言った。

「さあ、行きましよう。勇者様」

顔に満面の笑みを浮かべるその姿を見て、遼はいよいよ天からお迎えが来たのだと思った。

――

さて、屋敷を出発した二人はというと、魔王城が余りにも近すぎることに驚いていた。

「もう目の前じゃねえか！」

「本当ね。まさかこんなに近いとは思わなかったわ……」

小高い丘の上に聳え立つ魔王城を見上げ、二人は驚嘆した。

しかし、そこに辿り着く為には、かの城まで続く長い長い石段を登っていかなくてはならなかった。

所々崩れかけているそれは、見るからに歩を躊躇^{ためら}わせる。

だが、この男は違った。

「こんなの、見掛け倒しだろ！」

遼は軽い気持ちでひよいひよい石段を登って行く。

「待つて！ リヨウ、戻つて！」

後ろでテラが叫んでいたが、遼は「大丈夫だ」と声を張り上げて先に行く。

すると、遼の視界にあるものが飛び込んできた。

彼は良く目を凝らしてそれを見ると、やや驚いたように呟いた。

「なんで、これがここにあるんだよ……」

彼の視線の先。そこには、階段同様石で作られた台座があった。しかも、その上に乗せられているのは、P。Pと。S！

その二つの間には立て札があり、『汝は何れかを選ぼう？』と書かれている。

いかにも罨です。という雰囲気だったが、遼は躊躇うことなくSPを手を取った。

「俺はもちろんPS。派だぜ！」

勝ち誇ったように空高くP。Pを掲げる遼。しかし、彼は気付いていなかった。石段がとんでもない状況になっていることに。

「遼！ 危ない！」

下の方からテラが叫ぶ。だが、もう遅かった。

「うわっ！」

いつの間にか石段はつるつるの坂道に変わり、彼はそのまま滑り落ちていった。

テラは身の危険を感じたのか、坂道の脇に退避した。その途端、遼が悲鳴を上げながら滑り落ちてきたのだった。

――？――

それから二人は慎重に石段を登って行った。

先程のつるつる坂道は、遼が滑り落ちてきたすぐ後に元の石段に戻ったので、再びこうして登ることが出来るようになった。

テラも遼も無言で、言葉を発しようという気配が感じられない。

ただ黙々と石段を登るだけで、両脇に先程のような誘惑物があっても目を合わせようとはしなかった。

二人とも、これから怒りうるであろう闘いに備えて、イメージトレーニングを行っているのだろう。時折手を動かし、その動作は戦いそのもの。

上空でカラスのような鳴き声を響かせる怪鳥も、二人の眼中には無い様子であった。

石段を登りきった二人は、目の前の扉を見てビックリしていた。
「小さっ!!」

その大きさは、遼より少し大きいくらい。とてもではないが、ここに来る時に出くわした魔王の手下と見られる大男が通れるものではなかった。

木製の、いかにもひ弱なそれは、堂々たる魔王城にはとてもではないが不恰好だった。

「でも、大きすぎるよりはいいわよ」

テラが呆れながらも正論を述べた。確かに、大き過ぎては開閉の際に大きな音が立つので非常に目立ってしまう。

しかし、この小さな扉ならば静かに中へと侵入することが出来るのだ。

「確かにな。んじゃ、早速中に入るか」

「そうね。そうしましょう」

そうして二人は扉についている猫の取っ手を握り、思い切り引いた。

その途端、某レストランに出入りする際に流れる音が流れた。

「やばっ!」

「早く行きましょう!」

狼狽した二人は、大急ぎでその場所から離れようとしたが……

「待つんじゃ、その二人」

突如として掛けられた声に立ち止まることになった。

テラと遼は互いに顔を見合わせ、同時に声の主を見た。そこには、黒基調のドレスを身に纏った小柄な少女がいた。

首元を覆うフリルのバンド。腰まで届くであろう滑らかな漆黒の髪の毛は、頭の両脇で結われている。巷で言う『ツインテール』だ。端正な顔立ちをしていて、瞳は紅蓮の炎を思わせる。

体格はまだ発達し切れていないようで、小学生を連想させた。

「なんじゃ? 髪になにかついておったか?」

触れただけで折れてしまいそんな細腕を頭に伸ばし、手触りで異

物を探しているその姿に、思わず鼻の下が伸びるのを感じた遼はあわてて口を開いた。

「お、お前は一体何者だ!？」

彼の隣で、テラが頷く。

「なんじゃ？ わしの名かの？」

「そうだ！ 名乗れ！」

「その言葉、わしが言うべきものだと思うのじゃが……」

「いいから名乗れ！」

「仕方ないやつじゃのう……。名乗るほどでもないが、わしの名はラスタルフ。ラスタルフ・ゴルバドールじゃ」

少女が名乗った途端、テラと遼がその場で凍りついた。少女、ラスタルフは、「はて？」と顎に手を当て、首を左に傾けた。

「どうした。いじわるせず、わしの何処がおかしいのか教えるのじゃ。そうしていられば、恥ずかしゅうて困るのじゃが……」

頬を赤く上記させ、もじもじしだす魔王。その姿からは、彼女が魔王だというのは考えにくかった。

一方テラと遼は、なるべく小さな声で話し合っていた。

「聞いてないぞ！ 何で魔王があんなに小さくて可愛いんだよ！」

「し、知らないわよ！ 私だってラスタルフが、あんなに弱い少女だなんて思わなかったわよ！」

「でも、倒さなきゃいけないんだよな？」

「ええ。あれでも魔王だからね……」

「どうやって倒す？」

「それは、私が動きを封じている間に、リヨウの大剣で……」

「大剣がどうしたのじゃ？」

「っ!?!？」

いつの間にか、ラスタルフが二人の傍まで来ていた。

最後の部分を聞かれたと見て、二人は慌てた。

そんな二人の様子を見て、あどけない魔王が場の空気を変えるかのように言った。

「ここではさむかるう。続きはわしの部屋にてするでしょう。ついでまいれ」

「……」

テラと遼はその一言に啞然としていたが、スキップをして上機嫌な魔王ラスタルフの言に従うことにした。

《結》

――？――

魔王城内は、綺麗に整頓されていた。

長い廊下には赤い絨毯が敷かれ、所々には美しい絵画が飾られている。

「これって、動いたりしないよな……」

見事な絵画を横目で見た遼は、思わず呟いた。すると、ラスタルフが振り返り、呆れるように笑った。

「そんなわけなかるう。全て本物の絵画じゃ。わしの趣味のひとつじゃ」

「それは凄いな……」

「ふんっ！ わしの手には掛かればこんなものじゃ！」

ぺたんこの胸を張り、魔王は得意げだ。

そうこうしているうちに、ラスタルフはある扉の前で立ち止まった。

「少し待っているのじゃ」

あせるように言い捨てると、一人だけ部屋の中に入っていった。

絨毯の敷かれた豪華な廊下に残されたテラと遼の二人。お互いに顔を見合わせ、扉の向こう側で少女が一体何をしているのかを妄想

しあっていた。

「テラ、この中ってどうなってると思う？」

唐突に遼が口を開いた。

「うーん……人体実験場？」

「それは絶対に無いと思う」

「何でそう言いきれなの？　ここは魔王ラスタルフの居城なのよ？」

「でもなあ……」

遼には、先程からラスタルフの様子を見ていたが、とても残虐な心を持っているとは思えなかった。

実際に、室内から聞こえてくるものは、“ぬいぐるみ”だとかそういう類のものだった。

『ああ！　クマさんが！　ネコツトさんもだめえ！』

「……」

廊下に、不思議な沈黙が流れた。

――？――

しばらく廊下で待っていれば、扉が開かれた。

「待たせたな。もう入ってもよいぞ」

先程の出で立ちそのまま、ラスタルフは笑顔を浮かべていた。

彼女に連れられて部屋の中に入れば、そこは何処にでもありそうな少女の部屋だった。

「そこに腰掛けるがよい」

遼とテラはそういわれてみてみれば、ピンクの可愛い刺繍が施された椅子だった。

「あ、ありがとう」

戸惑いながらも、一先ず座る。それを確認したのか、ラスタルフも同じような椅子に座った。

途端、三人の正面に、透明のスクリーンらしきものが出現した。

「うお!？」

「な、なに!？」

二人は驚いて声を上げていたが、ラスタルフは平然と口を開く。

「お主ら、このわしを倒しに来たのじやろう？」

「くっ……!」

どうやらラスタルフには二人の来訪の意図が分かっていたようで、あどけない顔に浮かぶ笑みには愛嬌が消えていた。だが、それでも可愛らしさはご健在だった。

「ならば、これでわしを倒してみよ!」

パチンとラスタルフが指を鳴らすと、遼、テラ、ラスタルフの三人の前に現れた一台のゲーム機器。

「こ、これは……!」

「?」

疑問符を浮かべるテラをよそに、遼は益々驚きを隠せない。

なぜなら、目の前にあるゲーム機器は、遼がよく使用するそれそのものだったからだ。

日本でも最大といって良いほどのゲーム会社で発売された、家庭用ゲーム機。

「任。堂、Wi……」

「なんじゃ、お主良く知っておるのう」

「いや、俺持つてるし」

「そうじゃったか。ならば腕が鳴るのう」

妙にはしゃぎだした魔王を視界に捕らえつつ、ゲームが起動したのでスクリーンを見た。

そして、啞然。

スクリーンに映っていたのは、これまた遼がやりこみ、先日完全クリアをしたばかりのソフト。

「スマ。ラじゃねえか!」

そう、あれである。

「お主、随分物知りじゃのう」

「いやいや、これも持つてるからね？」

「そうか、それならば話しが早いのだ。この大。闘で三勝した方が勝ちじゃ。さあ、キャラクターを選ぶのじゃ！」

とその時、遼の隣で静かにしていたテラが、か弱い声を出した。

「私、ちよつと無理かもしれない……」

「えっ!？」

遼は戸惑う。なんせ、魔王は物凄く強いかもしれないので、二対一で同等かもしれないと思っていたので、まさか正々堂々の勝負へと換わるとは思っても見なかったようだ。

「ふむ？ その女よ。お主が抜けたら男一人になるのじゃが、それでもいいのかえ？」

魔王が意地悪そうに言うが、テラには聞こえていないと見える。頻りに傍らの男に懇願しているようだ。

「リヨウ、お願い……」

「うっ……」

小動物のように小さくなってしまった少女の上目遣いを頂戴し、遼は引くことが出来なくなった。

（ここでテラと一緒に戦ったら、ギリギリで勝てるかもしれないでも、俺一人だったら、負けるかもしれないからな……）

頭の中で天秤を創造し、“一人で戦った時”と“二人で戦った時”を量る。

（でも、俺は一人でいろんな技術を身につけながらクリアしたんだ。二人だったら、せつかくの技術が使えなくなるんじゃないか）
天秤が一人の方に大きく傾く。

（しかもテラは“ラスタルフと同等。いや、それ以上”って言うてたじゃないか。あれはきつとゲーム技術のことを言うてたんだよ！）

とうとう天秤が振り切れて、はじけた。

「よし、一人でやってやる」

遼の瞳に紅蓮の炎が燃え上がった。

「容赦はせぬぞ？」
魔王ラスタルフは、その顔に似つかわしくない妖艶な笑みを浮かべた。

――

早速ゲームが始まった。

魔王ラスタルフが選んだのは、ゼ。ダの伝説でおなじみのリ。ク。一方、遼が選んだのは、ピンク色で、なんでも吸い込んでしまう少し恐ろしいようで可愛いあいつ。

ステージは何故だか終。だった。

「さて、わしの腕前を見るがよい！」

開始早々、ピンクボールに容赦なく襲い掛かる剣士。しかし、その攻撃がヒットすることは無かった。

「どうした？ あたらないぞ？」

遼は回避を上手に使って斬撃をかわしていた。

「むう！ 何故じゃ！ 何故当たらぬのじゃ！」

徐々にはあるが、魔王に苛立ちが見え始めた。

それを見た遼は、攻守交換といわんばかりに激しいコンボをお見舞いした。

「行けえ、“ショッキングブラスター！”（注・ただの攻撃です）」

「ぐふう！」

「お次は“ヘビープレス！”（注・例のストーン攻撃です）」

「げふあ！」

「締め“ライジングスマッシュ！”（注・ただのスマッシュ攻撃です）」

「ああ！ わしのリ。クがあ！」

遼、余裕の一勝目。

続く二戦目、三戦目もノーダメージで魔王を下し、遼の完封勝利

で幕を下ろした。

「わしが、わしが負けるとは……」

床に手を突き、ラスタルフは心底ショックを受けているようだった。

「す、すまない。つい本気になっちゃった」

「別に気にするでない。わしの力が及ばなかっただけじゃ」

そんな二人を遠くで見つめるテラは、あっという間の展開に呆然としているだけだった。

《後記》

魔王ラスタルフを（ゲームで）倒し、世界に平和が訪れた。

これまで彼女に挑んだ勇者達は、魔王場内でゲームの特訓をしているだけで、命に別状は無かった。

ただし、ゲームによる精神的なダメージは大きく、暫く安静にするとの事だそうだ。

「終わってしまいましたね」

遼の隣で、尻尾を元気良く動すテラが言った。

「だな。何もかも」

地平線を見つめて、遼は呟いた。

「本当に感謝しきれませんね」

「別に。俺はただゲームをしたただけだし」

「でも、それが世界を救ったわけですし……」

「まったく、あっけない結末だな」

「ですね」

二人は声を上げて笑った。

風に揺られて、近くの柳がざわざわと音を立てていた。

ゲーム少年が世界を救う！？（後書き）

依頼されて執筆した作品です。

（初出：2011年4月10日、当サイト）

安堵した少女

「こ、ここは……!?!」

気が付くと、知里^{ちさと}は霧の中にいた。

辺り一面、真白^{ましろ}に覆われて、右も左も、前も後ろも何も見えない。一步踏み出してみても、景色が変わることはない。

彼女はなにを思ったのか、その場で両手を広げ、何回か勢いよく回り始める。

しかしながら、霧は晴れることなく、辺りは相変わらず真白のまま。

「私は一体、どうすれば……」

その場に座り込み、彼女はポツリと呟き、溜息^{ためいき}ひとつ。為す術のない状況に、そこから動くことができなかった。

「うーん、うーん……」

かわいらしい熊のイラストが印刷された布団の中で、一人の少女がうなされている。

「しろい。しろいしろいしろい……」

ずっと同じような言葉を呟き続ける様を見ると、誰しも彼女が悪夢に侵されているのだと分かることだろう。

「来ないで、こっちに来ないで!」

彼女の悲痛な声が大きくなってきた時だった。

”ジリリリリ……!!”

けたたましい音を立て、布団の横に置かれた時計が鳴り出す。
「ふにゃああ……!?!」

その音に驚き、布団から飛び起きた少女はすぐさま音の発生源を

制圧した。

「び、びっくりしたあ……」

ハードロック調の胸を押さえながら、少女はもう片方の腕で寝癖の付いた長い髪をいじくる。

と、何かを思い出したかのように新緑のカーテンに近寄ると、その端っこを申し訳無さそうに開いた。その向こうには、いつもと変わらぬ眺めが広がっていた。

「夢、か……」

安堵の溜め息と共に、彼女の口を突いて出た言葉。

寝ていた時の少女とは一変、穏やかな表情を浮かべていた。

安堵した少女（後書き）

授業中、机に書き起こしたものです。

（初出：2011年6月26日、当サイト）

rainy days

ある日の午後、私は死んだ。

原因はあの人が……あの男が私を裏切ったから。

呪う。呪い殺す。そうは思いたくないけど、悔しい。

見つかって欲しくないけど、誰か早く見つけて。

森の奥で、木にぶら下っている私の亡骸を。

《元・彼氏の言葉》

彼女はとても愛らしく、それでいてかわいかった。それに、俺のことを心の底から愛してくれていたんだ。俺は最初のうちはとても嬉しかったよ。毎日家に帰れば、「あなた、今日はちょっと頑張ってみたの」って、俺の大好物を心を込めて作ってくれたりしたんだ。日々が最高だったさ。……でも、ある日を境に彼女は変わってしまったんだ。何かに取り憑かれたかのように、毎日毎日何かを呟いたり、なんだろうと思っっていると突然泣き出して、「私を愛しているんだよね。本当の本当に愛しているんだよね」って。正直怖かったよ。でも、そんなことなんかまだいい方なんだ。彼女の俺に対する愛は次第にゆがみ始めて、物に当たり始めるようになった。別れる数日前、俺に刃を向けて追ってきたっけ。「私はあなたを愛してる。殺してしまうくらいにね!」って。ほとんど絶叫に近かったと思う。目が血走ってて、本当に俺を殺すんじゃないかと思ったよ。あの時ほど生きている心地がしなかったのは初めてだね。……（中略）……。今、俺は彼女がどうしているか知らないんだ。別れてから、一切連絡を取っていないからね。……おっと、雨が降り始めた

な。窓を閉めなければ。吹っかけてくるから、部屋の中が水浸しになってしまふ。君、ちょっと手伝ってもらってもいいかな。

《森の近くに住む男の話》

はい、はい。その女性なら、数日前にこのあたりで見かけました。ひどい猫背で、長い髪が、まるでカーテンのように顔を覆い隠すようにでしたな。足取りは……何といいますが、片足を引きずるような印象を受けました。……えっ、どちらの足がですって。たしか左だったと思いますよ。はい。そのまま女性は森へ向かっていきました。……そうだ。そういえば、大きな袋を持っていましたな。なにが入っていたかは判断しかねますが、重そうな様子ではありませんでした。不思議なくらいですよ。あの森へ近付こうなんて。とんだ物好きだったんでしょうね。

どうして。どうしてなの。

死んだはずなのに、どうして苦しいの。
痛みなんて感じないと思っていたのに。
どうして、身体中が軋むように痛むの。

誰か教えて、誰か……

《隣人の今日記事見た話》

ええ、ええ！ 私、^{わたくし}見てしまったんですの。長いロープ（よく『立入禁止』とかの場所に張ってある、あの黄色と黒のあれですわ）を手に持って、時折首に巻いては締め上げて、狂ったように笑うあ

の人の姿を！ ああ！ 私、頭がおかしくなりそうなくらい驚きましたわ。あれは正気の沙汰ではございませんもの。狂っている。何もかも狂っておりましたのよ！ ……えっ、それはいつの話かですって。よく記憶していないのですけれど、確か、一月ほど前だったと思いますわ。ええ、一月前。小雨の降る、不気味な夜でしたわ！

《橋架下のホームレスの話》

なんだい。この写真の女を知ってるかって。どれどれ… ああ、この女か。知ってはいるが、話したことなんざないね。三週間くらい前だろうか。俺が公園に行ったときなんだけどよ。その女が道端にしゃがみ込んで、何かを呟いてるのよ。気になったもんだから、足音を忍ばせて近づいてみたのさ。そしたら女は、“死んでやる。〇〇（町の名前）の森の中で、首を吊って死んでやる”って、何度も何度も呟いていたのさ。そら恐ろしくなって、俺は急いでそこから逃げ出したのよ。……あ？ 感謝するだ？ 別にそんなのいらねえよ。俺は見たこと聞いたことをそのまま一言一句変えずに話したただけだからな。

悲しいくらい、寂しいくらい。
嬉しいくらい、怒おこしいくらい。
今になって、思い出が甦よみがえる。

もう、消し去ったはずの思い出が。
パズルのピースみたいに、そろってゆく。

《。。。駅員の話》

この女性ですか。知っていますとも。“森への生き方を教えていただけますか”なんて変な質問をしてきましたから、よく覚えています。とても変わっていましたよ。大勢の中で浮き立っていましたからね。ぼろのような服で、髪の毛もぼさばさで。でも、両の目はもう血走るといったほうがいいですかね。まるで、身体は女性、瞳は怪物みたいでしたよ。はい。

《森の中で女の亡骸を見つけた木こりの話》

いやあ、見てはいけねえものを見てしまった。この仕事で森によく入るんだが、いろんなものに出会うんだな。でも、人の死体に出会うのは今回が初めてでさあ。どうやったのかは分かんねえけど、10mあんじゃねえかって木の一番上にある太い枝にロープを括り付けて、地上…何mだ。7、9mぐらいにぶら下ってるのさ。しばらくその状態だったみてえで、首の長さが異常だったなあ。皮膚の色も少し変わっていたし。……でも、あの女、死んでるはずなのに、目だけは強く自己主張しているようだったな。そら恐ろしくて、俺、腰抜かしちゃったよ。急いで十字さ切って、森から警察署まで一息に走ったというわけさ。

ようやく見つけてくれた。

早くここからおろしてほしいの。

静かに雨が降ってきたから。

私の亡骸をゆっくりと

悲しい雨が濡らしていくの。

ゆっくりと、ね……。

rainy days (後書き)

夏のある夜にふと思い立って、三日で書き起こしたものです。
(初出：2011年9月某日、某高校文芸部誌)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6565y/>

短編集

2011年11月20日16時21分発行